尾州の知と技

シリーズ10

# 尾州・テキスタイル・カレッジ 開校から3年目へ

尾州・テキスタイル・カレッジ　学長　堀　　満夫
（IWS・ノミニー・コンパニー・リミテッド日本支社　アジア開発センター　顧問）

明治24年（1890年）岐阜県根尾地方を震源とする濃尾大震災は尾州地区にも多大な被害を及ぼし、それまでの綿作と綿織物の生産が再起不能状態となり、壊滅した。そして当時の富国強兵、近代化政策のもとで、繊維分野では毛織物への関心が大きく高まり、明治31年（1897年）津島で毛織物工場が産声を上げた。その後二十数年をかけて尾州の毛織物産地の基盤が形成され、国内屈指の毛織物の産地へと成長した。この間尾州ならではの優れた企画・意匠力、高い技術が育まれて、現在でもその染色技術、複合繊維化、各種機能性加工など高く評価されている。しかしながら、産声を上げてから100年余りが経過し、アパレル生産の中国などの低賃金国へのシフト、また製品の低価格化などで、徐々に競争力が落ちて、産地は縮小を余儀なくされ、産業基盤そのものの崩壊が危惧されている今日である。この結果、専門知識の散逸、集積技術の消滅の危機、継承者問題など、大きな問題が浮上してきている。

こうした状況下で、「産地に残存する高い技術力、優れた企画・意匠力を、人材教育を通して、もう一度アパレルや小売業界に再認識してもらい、地場産業の生残りを図らねばならない」との目的で、本カレッジが、ウール工房テキスタイル館とザ・ウールマーク・カンパニー・アジア開発センターの共同で平成14年4月に開校された。カレッジではウールを中心とした繊維の基礎から流通までの9講座を3日間で行っており、そして2年が経過した。アパレル、商社・コンバーターおよび百貨店・小売業を中心に、初年度は98名、そして昨年度は131名の受講生があり、愛知県産業技術研究所尾張繊維技術センターや一宮地場産業ファッションデザインセンター、また地元の経験者の皆さんのご協力、ご支援を受けながら、なんとか少しずつ受講者を増やして行くことができた。

カレッジでは、「見て・触って・創って」のコンセプトで、従来のような聴講だけの講座でなく、できるだけ多くの体験を通して受講生に理解してもらうことを基本としており、同時に、2夜にわたって行われる受講生間あるいは講師との交流会で、受講生に新しい人的関係を構築してもらうことも重要と考えている。

「何よりも刺激されたことは、講師の皆さんのテキスタイルに対する愛情や熱心さに触れたこと」、「今後求めていかねばならない機能性材料のヒントが天然繊維の中にあるのではないかと気がつきました」、「ただ単に用意された素材を選定するのではなく、糸や織物メーカーと共同でわけあり素材の開発をしなくてはならないことに気付きました」、「普段接点のないアパレル、小売そしてクリーニング関係の方々と接点を持てたことは、今後大変役に立つと思います」などと嬉しいコメントが受講生から返ってきており、当初の目的が、まだ十分ではないにしても、達成されつつあると思うと感激である。

この4月から3年目となり、従来のように年間10回の定期開催以外に、特定企業へのオーダーメイドのコースを増やし、特に東西各方面からの受講生に真の尾州産地を体験してもらいながら、尾州と確固たるリンケージを多数構築してもらうため、講師一同最善の努力をしたいと考えている。皆さんのご協力をお願いしたい。